

序にかえて

便利さもほどほどに

女子栄養大学教授 櫻井純子

〔女子大生「器用さ」…50年前の中一水準〕これは今夏の全国紙S新聞記事の見出しです。女子大生の手指の“器用さ”は約50年前の中学校1年生レベルに落ちている可能性があることが、関係大学教授らの調査結果で分かったというものでした。関係者の話では、「家事の電化などで手先を使わなくてもよい社会になっていることもその一因ではないか」ということでした。

かつて、アメリカ・ウエストバージニア州の学校を訪ねた折、「こちらでの学校ではどのような教育を目指しているのですか？」とたずねると、多くの学校から「Hands onの教育を推進しています」という答えが返ってきたことを思い出します。つまり、手で学ぶ教育の推進ということで、さしづめ実践的・体験的な教育を重視しているということになるのでしょうか。低学年からものを作る学習や体験する学習活動はむしろのこと、実際に試みたり経験したりして知識を得る学習方法を多く取り入れていました。例えば小学校低学年のスペリング（書き方）の学習では、ワークシート、クロスワードパズル、マグネット付きアルファベット、シェイピングクリーム（画板状のものにシェイピングクリームを塗り広げてあり、その上を指で文字を書く練習をする）、コンピュータなどを使って学んでいました。ちなみに子供達に人気のあるのはシェイピングクリームとコンピュータで、人気のないのは紙と鉛筆で学ぶワークシートだそうです。説明によりますと単に知識を詰め込むのではなく、子どもの興味を引きながら遊びの感覚で覚えたり考えたりする実践的な活動による学習のほうが身に付いた力となる、ということでした。知識には紙の上で得る知識と手や体を使って体験的に得る知識とがあります。この両方の知識がバランスよく身に付いてこそ、よりよい人間形成を培う基盤となることは衆目の一致するところでは

しかし、現在の私たちの生活は究極の便利さの中で営まれており、手や体を動かしたり何かを作ったりしなくても支障なく生活できます。ボタン一つで御飯ができる、クリック一つで商品が届く、子供たちは包丁を使ったりお湯を沸かししたりすることもあまりないようです。ある調査によりますと、日本の子供たちは12歳まではお手伝いに関する行動は僅かながら広がっていますが、中・高校生になるにつれ逆に減少するようです。社会や生活の場では、どんなに頭を使って考えても、その考えを社会の現実や他者とかがかわらせながら自分自身の体を通して具体的に生かしていくことが必要となります。

小学生のA君は実践報告で「両親が出かけていたので妹にインスタントラーメンを作ってあげました。学校で栄養のことを学んだので卵を入れようと思い、うまく割れるかどうか、胸をドキドキさせながら卵を割りました。上手に割れてほっとしました。妹も喜んで食べてくれました。」と記しています。学習したことを妹のために実践しようと一生懸命に取り組もうまくできた、この経験はA君の充実感、自信や意欲へとつながっていきます。さらに妹を満足させることができ、ほのぼのと心豊かになっていくA君の様子がうかがえます。モノづくりだけではなく、そのことを通して人への思いを伝えたり人との関係を作ったりする技術を身に付けていくことができます。

「手は外部の脳である」といわれるように、手と脳とが大変緊密な関係にあることも明らかになってきています。子供たちが人間が持てる手の働きを大いに活用し、身近な生活を整えたり料理を楽しんだりして、脳の発達を刺激し、生きる力を身に付けていってほしいものです。日常生活の中で直接体験を通して得られる生活力を取り戻すためにも“便利さもほどほどに”と思っています。